



■ビオトープ・サロン 2020年徳島の未来に向けて…みんなの思いを組織の使命に！ No.3

今号も、045号に続いて「2020年徳島の未来に向けて（2010年3月）」の第3弾を紹介します。（編集部）

【農村の初夢】

記者：石川茂夫（会員）

川と水田とを結ぶネットワークが再生されて、メダカ、ドジョウ、フナ、ナマズなど身近な魚が川と水田との間を自由に行き来できるようになっている。水生植物も在来の植物が繁茂している。魚類の数が増えてコウノトリ、トキも飛んでくる。

ため池には冬場カモが飛来し、カモが安心して越冬できるように人が近づけない場所と観察できる場所とができています。

農地が広がるところでは、ツルが越冬できるように冬水たんぼもあり、餌となる稲の2番穂が残されている水田もある。

農地の広がりの中にある耕作放棄地は適正な管理がなされており、秋の七草のフジバカマ、キキョウ、ナデシコ、オミナエシも生えていて周囲の農村景観と違和感が無い。

次の写真のような感じでしょうか。



倉谷池のカモ



排水路のミズオオバコ



浦池のアサザ、ヒシ

今後の十年の具体的な目標とはならないかも知れませんが、将来実現すればいいなと思っています。（2010年3月）

【土木技術は、先人に学び、現代科学技術を如何に活かせるかでは？】

記者：糸田川廣志（会員）

私は、立命館大学土木工学科卒業の土木技術者です。1948年生まれの団塊世代です。卒業後、下水道設計コンサルタントで設計技術者として技術研鑽をしてきました。また1974年（26歳）からは、会社創設に携わり自立・自営の道へと向かい、技術士に合格し登録したのは、1984年1月です。

技術士登録後は、技術研鑽をしながら「理念構築」を志向して現在に至り、還暦以後を意識して設立した所属する（有）環境創成は、社名に自分の理念をこめました。

土木技術を勉強する中、先人達が自然と共に暮らしてきたこと、自然を利用し活用してきた事などを理解するようになりました。昔がよいというのではなく、その精神を学ぶべきと思っています。自然との共生を基本とし、自然を活用する精神がうかがえます。

私の専門分野である下水道も、江戸のエコと言われる日本古来のサイクル社会に学ぶべきものがあると考えています。土木技術もしかりです。例えば、洪水調整ダムは底部に穴を空けるとか、堰（可動堰を含む）はメッシュ等の透過性部分もあって土砂を下流へ運んで河川生態を維持できるように考えていくとかです。科学技術をそこへ活かさないものかと・・・

私の年賀状には、“SAVE THE EARTH”を必ず書くようにしています。それは地球を見るような視点で考えてもらえるかも知れないからです。私自身は、土木技術が国民の生命財産を護ることを意識し、先人達の知恵に学び現代の科学技術をどう活かせるか、真摯に考えていきたいと思っています。今後は、森林保全・育成・整備とさらなる基本に取り組んでいきたいと考えています。（2010年月）

■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう!

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。(編集局)

【施工部門：正答と解説は次号で紹介】

問046：さまざまな野生生物を呼び込むという観点からみて、適切な考えを選びなさい。

1. 粗朶積みとして使用する枝や木の幹は、種類を訪わず、なるべく太いものを使用する。昆虫類の越冬場所の利用を考える場合には、なるべく日なたに設置することが望ましい。
2. 生垣に使用する樹木は種類を問わず、管理のしやすさや見た目の美しさを考えて同一種でまとめた方がよい。
3. 石積みはトカゲやハサミムシなどの小動物が利用する。材料には割栗石を使用し、崩れないようになるべく石と石の隙間はなくした方がよい。
4. 同一形態の野鳥の巣箱を多数設置することは、特定の種だけを増やす可能性があり、自然生態系のバランスを崩すことになりかねないので避けた方がよい。
5. 蜂宿として積み重ねるか、あるいは束ねた篠竹は、主にアシナガバチの仲間が利用する。その際、使用する篠竹は、なるべく同じ太さのものを集めるとよい。

■前号045の正答「4」

草地は、1年に4～5回の草刈りだと、タンポポ・スミレ・ホトケノザ・ハコベ・ナスナ・ハハコグサなどの低茎草本が優先し、2～3回だと、ハルジオン・イヌムギ・ネズミムギ・イヌビエなどが優先する草丈1m程度の草地が形成されます。年1回または数年に1回程度だと、ススキやオギなどの草丈2m前後の高茎草本が優先します。5年～10年に1回だと、ヌルデ・アマメカシワ・クサギなどの低木類が侵入し樹高4m程度の樹林に遷移します。カヤネズミは、九州など南部の地域では春から初夏にかけてと、秋から初冬にかけての2回繁殖しますが、関東地方では夏の1回のみです。夏季繁殖期にはオギやススキなどの高茎草本に営巣しますが、越冬期にはサヤヌカグサやチゴザサなどの低茎草本の群落に多く出現することが明らかとなり、これまでカヤネズミの営巣数は、営巣に適した高茎草本群落の面積が重要であると考えられてきましたが、夏季に営巣数の少ない低茎草本群落の存在が冬季の生残に関係し、それが繁殖個体群のサイズに影響しているといわれています。

※2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。自然環境の保全に関わる方には、是非とも取得していただきたい資格です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/> (公益財団法人 日本生態系協会HP)

■ビオトープ・サロン 熱血オジサン奮闘記! ~ブログビオトープ気延の里~

寄稿：石井町のわんぱくおじさん(ビオトープ気延の里)

【越冬オタマ】

9月7日 晴れ 我々の活動拠点のひとつ“ハッハの広場”の池で不思議なことが、7月の下旬か8月の中旬だったと思いますが、オタマジャクシが大量に誕生しました。でそれが、一部はかえるになったと思うんですが、まだまだ多くの、おそらく200匹くらいのオタマジャクシが池の中でウジャウジャ泳ぎ回っています。教えてください。これってこのまま越冬するの?

(編集局より：ウシガエルはオタマで越冬します。ツチガエルも9月まで産卵しオタマで越冬することもありますが、夏の産卵では2ヶ月ほどでカエルになります。)



■みんなの“たからもの” 慌てるカツオは針を呑む

寄稿：KKさん

【獲物はどっち?…クモの巣に捕らわれたカマキリ】

ジョロウグモの巣にかかったカマキリ、なぜか食べられているのは巣をかけたジョロウグモでした。大きなごちそうを目の前にして、待てなかったのでしょうか?…それとも判断ミス?

しかし、おなかいっぱいになったカマキリもクモの巣から逃れることはできそうにありません。

いつだったか、徳島新聞にヘビを呑むトノサマガエルの写真が紹介されていました。昨年よく耳にした“想定外”は、人間の世界だけでなく、自然の中でもしばしばあるようです。

ちなみに、カエルは目の前で動くモノは何でも口にするそうです。「慌てるカツオは針を呑む」皆さんもご注意ください!



■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ふるってご参加ください! 編集局

【E-mail : kanv@nifty.com URL : <http://biotopetokushima.yu-yake.com>】